



Title	撰関家と式家儒者：院政期儒者論（二）
Author(s)	仁木, 夏実
Citation	語文. 2002, 79, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69010
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

撰関家と式家儒者

— 院政期儒者論 (二) —

はじめに

藤原不比等の息子、式部卿宇合に始まる藤原式家は、学問を業とし、平安時代中期以降撰関家の後押しをうけて躍進した所謂「起家」の一つである。院政期に成立した『本朝無題詩』、『本朝統文粹』、『詩序集』などの大規模な漢詩文集にはいずれも式家儒者が群を抜いて多く入集しており、それぞれの集の編纂に深く関わっていると考えられている。例として『本朝無題詩』と『本朝統文粹』の個人別入集数の上位十名を、式家儒者には○、また式家と姻戚関係にある人物には●を付して示してみよう。

表I 『本朝無題詩』個人別入集数

○1	藤原周光	一〇一首	●6	中原広俊 ⁽⁴⁾	五二首
2	藤原忠通	九一首	○7	藤原明衡	四八首
○3	藤原敦光	六三首	8	惟宗孝言	三一首
●4	蓮禪 ⁽³⁾	六〇首	9	大江佐国	二八首
○5	藤原茂明	五七首	10	三宮輔仁親王	二六首

表II 『本朝統文粹』⁽⁵⁾個人別入集数

○1	藤原敦光	五一首	6	藤原美綱	八首
2	大江匡房	四〇首	8	菅原在良	八首
○3	藤原明衡	三二首	10	藤原正家	五首
○4	藤原敦基	一一首		藤原有信	五首
5	藤原実範	九首		藤原有信	四首

仁木夏実

『本朝無題詩』(以下『無題詩』)は詩、『本朝統文粹』(以下『統文粹』)は文章を中心とした集であるが、なるほど○と●を付した式家ゆかりの人物がきわめて多く入集しており、詩・文を問わない式家儒者達の作品を知ることが出来る。この時期の漢詩文作者の研究が彼らに偏向しがちであるのも現存作品に恵まれたことに依るだろう。また、特に『無題詩』について式家の関係者に加えて撰関家の忠通が上位入集を果たしていることから、院政後期の漢詩壇には好文の宰相忠通を式家儒者が囲み、他家を圧倒したという印象が強い。しかし儒者達の動向を語る史料は何も『無題詩』や『統文粹』に限られるわけではない。先行研究に学んだうえで、この時期豊富に残される日記などの史料を活用することで彼らについてよりきめ細やかな

な把握が出来るのではないか。小稿はこうした視点から式家儒者と撰閲家のつながりについて考察するものである。⁽⁶⁾

一

付表は、史料類や漢詩文集から、忠通がその主催に大きく関わる作文、すなわち漢詩文制作の集まりを年代順にまとめ、同席した人物についても判明するかぎり挙げたものである。記事の残り方にややムラがあるうえ、同席者全員の名前が判明することは稀であるため、厳密な数字とは言い難いが、概ねの傾向は見て取ることが出来る。表中、二重傍線を施したのが式家、□で囲んだのが藤原北家日野流（以下日野流）の人物であるが、こうしてみると、式家儒者の出席数は確かに数多いものの、『無題詩』や『続文粹』の入集数で見られたような圧倒的な他家との差は見られない。一方、実光、行盛などの日野流儒者がそれに匹敵するほど出席し、講師や序者を勤めていることが分かる。

日野流は式家同様、撰閲家司としてその庇護下で成長した学問を業とする家である。⁽⁷⁾学問を業としながら、一方で代々蔵人や弁官といった実務官僚としての側面を持つことが式家と大きく異なる点である。鎌倉時代には蔵人、弁官を経て参議や納言に至る「名家」という家格を確立するが、忠通の時代はその基礎固めがなされた時期と言える。儒者としては行盛と頼業が文章博士を務め、儒者弁であった実光は忠通の詩筵に最も多く参加し、忠通の『法性寺殿御集』の合点を依頼される忠通の詩友であった。つまり、『無題詩』や『続文粹』などに現存する作品の多少、すなわち式家の他家への優越が、ただちに当時の文壇、少なくとも忠通周辺の状況を反映するものと

は言い難いのである。

二

式家隆盛の基を成したのは藤原明衡（九九一？～一〇六六）である。明衡は『本朝文粹』、『明衡往来』などを残し、晩年には式部少輔、文章博士、大学頭などを歴任して、類聚を家業とする学問の家という式家の性格を決定的なものとした。その子敦基（一〇四六～一一〇六）は父の死後、幼い弟敦光（一〇六三～一一四四）を養子とし、未だ脆弱であった家の基盤強化に努めた。敦基には実子令明（一〇七四～一一四三）、茂明（一〇九〇頃～一一六〇頃）と敦光に加え、養子と思われる周光（生没年不明。ただし、『古今著聞集』などによれば茂明よりも年上、令明と同年代と推測される⁽⁹⁾）の四人の息子がいたが、院政後期を代表する鴻儒敦光を頂点として彼らとその息子達、すなわち、令明の息子遠明（一〇九四～一一六九）、敦任（一一〇七～一一八三頃）、敦綱（一一一〇頃～一二〇二頃）、茂明の息子敦周（一二二八～一二八三）、敦経（一二二〇頃～一二九〇）、敦光の息子有光（二〇九九～一二七七）、長光（二一〇一～二一八六）、成光（二一一一～二一八〇）などの出た時期が、式家が文壇に最も影響力を持つことの出来た時期であろう。それは日野流には少し遅れるが、いずれも長命であった彼らは忠通がたびたび詩会を催した時期を日野流よりも広くカバー出来ているはずである。特に、日野流の実光や行盛が忠通よりもかなり年上であったのに対し、式家には茂明、遠明、長光ら忠通と同年代の人物が多くおり、その点でも日野流よりも有利であった。それにもかかわらず、日野流にわずかに劣る参加しか認められないのはどういふことなのか。まずは表に

見られる式家儒者を詳しく検討することから始めなくてはならない。すると、敦光とその息子達、そして周光の参加は多いが、忠通とほぼ同年代の茂明の名が全く挙がっていないことが分かる。また、令明も天永年間に二度ほど登場する程度であるし、その息子達遠明と敦任の参加も、保延五年（一一三九）六月四日の作文のみである。ただ、後述するが、この作文は他の出席者の顔ぶれにもある特色があり、他の忠通主催作文とは区別する必要がある。参加したものの名が伝わっていないことも考えられるが、学問を家業とする式家儒者であれば、参加した場合、諸役を勤めて名を残している可能性が高いであろうし、他家の儒者達にしても条件は同じであるから、さしたる問題とは考えられない。つまり、忠通の詩筵に侍った式家儒者は、敦光とその息子達、そして周光に大きく偏っており、敦基の息子達のうちでも令明、茂明の系統を殆ど含んでいないということになる。

三

付表、忠通文事年譜の事項に年代によつてムラが見られることはすでに述べた。忠通の少年期、天永から長承年間にかけては、父忠実の『殿曆』、親しい公卿の一人藤原宗忠の『中右記』、母方村上源氏の源師時の『長秋記』など忠通にとつて身近な人物の詳細な日記が豊富に残されているが、壮年期、保延から保元にかけての約二十年間の記録としてまとまって現存するのは忠通の弟、頼長の『台記』がほぼ唯一である。以下しばらくこの『台記』における式家儒者達の姿を追つてみよう。

『台記』天養元年（一一四四）十一月一日条に、次の記事が残る。⁽¹¹⁾

朝、伶人を召して楽を挙げんとするに、人伝へて云はく、式部大輔入道敦光、去んぬる月の二十八日を以て入滅すと。余驚きて伶人を罷む、師爲るに依るなり。件の人、書始めの時の師なり。其の外習う所無し。然れども、尊敬無かるべきには非ず、（中略）、去んぬる年、大内記令明卒して、四十九日宴樂せず。今七日之を止むは、師礼有りと雖も、習う所無きの故なり。

敦光の死去の報に接した折のものであるが、この記事より敦光が頼長の書始の際に師を勤めたが、以降は疎遠になつていたことが分かる。頼長は敦光の死に対し、楽を七日間停止して師礼をとるもの、実際にはそれはあくまで「習ふ所無」き師であつた敦光に対する形式的なものであつた。頼長の敦光評としては、敦光の出家の報に対する「鳴才に非ずと雖も、雜筆当世に冠絶す。天斯文を亡せるか」（天養元年四月二十日条）がよく知られているが、ここでも敦光の才学についての頼長の評価は、雜筆、すなわち詩文は当代随一としながらも「鳴才には非ず」という保留付きのものでしかなかった。それとは明らかな対照をなすのが、記事の中略以後に名前の挙がる、敦光の甥、令明である。令明はこの前年の康治二年（一一四三）八月二十五日に死去しているが、その時の記事を挙げる。

大内記藤令明（余の師なり）俄に疾病し、まさに死せんとするの由、其の子敦任告げ送る、（中略）、余悲しみの甚だしきに、家臣に命じて宴樂を停めしむ。伝聞するに、已の刻客來たりて、令明衣服を撰してこれに逢はんとするに、俄に病となり入りて内に臥すと云々。紀伝の儒、敦光・成佐等の外、其の才の令明に及ぶ者無し。惜しいかな、惜しいかな、生年七十、

三日後の二十八日には令明の弔問に源俊通を遣わした。次のように

ある。

前少納言俊通をして令明を弔はしむ。重師たり、仍つて此の人を使う。余書始めの時、敦光朝臣師為るも、意は令明においです。幼少時、私ひそかに孝経を習い、又長じて、文選一部を習う。仍つてこれを貴ぶ。今夜葬なりと云々、

さらにその一周忌には五部大乘経を供養し、その日の日記に「或る人の夢に、令明冥官為りと云々、多才正直の然らしむるか」(天養元年八月二十四日条)とも記している。

この頼長の反応が敦光死去の際のものとは全く異なることは明らかであろう。令明の場合は息子敦任により危篤の報がもたらされているが、敦光の場合には死後三日を経てから人づてに死去を知らされていること、宴楽停止の期間の長短、遺族への弔問の有無など、対照的な点はいくつも挙げられるが、その理由はすでにこれまでに見た記事のなかで頼長自身が述べている。すなわち、令明は『孝経』、『文選』を習った師として貴ぶけれども、敦光は書始の折の形式的な師でしかなかったのであり、師礼もそれに見合った形式的なものを選ばれたのである。また、令明の急死に際しての「余悲しみの甚だしきに、あるいは「惜しいかな、惜しいかな」といった表現、そして一周忌の記事に見られる令明評価は、冷酷・残忍と評されることの多い頼長が時折見せる、ごく身近なものへの深い情愛に通じるものがあり、頼長にとつての令明の存在がいかに大きなものであったかを物語っている。

頼長は、文学に没頭した兄忠通とは異なり、風流韻事よりもむしろ儒学や史学を好み、積奠晴儀の復興など数々の試みを行ったことが知られている。その一つに彼が自邸で行った講書がある。孔子の

画像を掲げた場で『論語』や『礼記』、『春秋三伝』などの講義と問答を行うものであるが、頼長は親しい人々を招いて毎庚子の日恒例の行事としていた。『台記』に見られるそのような講書の記事は、同様に老子を祭った行事も含めてすべてで百回余りにも及ぶが、それに参加した人物を参加回数が多い順に挙げると次のようになる。

表III 頼長邸講書参加数

1	菅原登直	四七回	9	藤原孝能	一三回
2	藤原成佐	三八回	10	藤原友業	九回
	清原頼業	三八回	11	源実長	八回
4	源俊通	三一回	○	藤原遠明	六回
5	藤原憲孝	二五回		中原師元	六回
6	藤原敦任	一九回	○	藤原敦綱	五回
7	藤原孝善	一六回	15	藤原親佐	四回
8	中原広季	一五回			

上位十五人までを挙げたが、主要な構成員はほぼこれで全てと言ってよく、撰問家の嫡子とも目される人物を囲むサークルとして決して大きい規模ではない。また、その殆どが家司層に限られる閉鎖的なものであった。その中に○を付した令明の息子達が含まれていることには注目しなければならない。そして、ここでもう一度付表に戻り、保延五年(一一三九)六月四日の作文の参加者を確認してみよう。さきにこの会にある傾向が見られるとして、令明の息子達、遠明と敦任の参加の意義を考えることを保留したが、それはこの会に限っては参加者の殆どが表IIIで挙げた頼長を囲む文人たちによって占められているためなのである。忠通を中心とした他の集まりにこれらの人物が全く参加していないこと、そしてこれが忠通が頼長

を招いて開いた会であることからすれば、この会に遠明と敦任が参加しているとはいえず、それは忠通を囲む文人の中に二人が数えうるということを示すものではなく、忠通に近い人々とはまた異なる人々のうちに頼長を中心とするサークルが存在していたことを裏付けているのではないだろうか。そうであれば、その頼長を囲むサークルは保延五年にはすでに形成されていたということとなる。当時頼長は十九歳。自邸での講書を開始する康治二年の四年前のことである。

四

では、令明の弟、茂明についてはどうであろうか。講書関係の行事にはほとんど参加が認められないものの、やはり頼長の手足となつて仕えている様子は『台記』に見える。特に重要と思われるものをいくつか挙げてみよう。

まず、茂明は頼長の次男、師長の読書始の師を勤めている。

二十三日より雨降り、今日猶降り。師長、初めて五帝本紀を読む、文章博士茂明朝臣を以て師と為す、(後略)、

(仁平元年七月二十六日条)

長男兼長の読書始の折に師を勤めたのは藤原成佐であった。元來、学問を業とする家の出身ではないが、師として頼長に最も尊重された人物である。しかし、成佐はこの年の正月に亡くなつており、その代わりとして茂明が選ばれたものようである。

茂明は頼長の詩作に関する催しにもしばしば姿をみせている。久安三年(一一四七)八月二十九日に行われた『儀礼』竟宴に参加しているほか、久寿元年(一一五四)四月三日に頼長邸で行われた、

氏長者・執政就任後初の詩会では序者と題者を兼ねている。夙に指摘されている通り、頼長を中心とするサークルには、明経道の清原頼業や明法道の中原家の人間など紀伝道以外の道の専門家たちや、藤原憲孝に代表される、特に学問の家とは言えない下級貴族が多い³⁰。さきに示した表Ⅲ、頼長邸講書参加者の上位二人、菅原登宣と藤原成佐にしたところで、登宣は文章博士時登の子とはいえ養子であり、成佐も代々受領を勤める家の出身でありながら、式部少輔に至ることができたのは、頼長の推挙によるものであった。このようなサークルにおいて紀伝道を業とする伝統を担っていたのは、ほぼ式家儒者達に限られていたのである。その中で最年長であり、儒職にあつた茂明の活躍の場が経書の講書ではなく、詩作の場に偏っているのにはそうした事情があるのではないだろうか。頼長が講書を開始したのは茂明が五十数歳の頃と考えられるが、その茂明にとって経書の講読・問答という、頼長の新しい試みに加わることが容易いことであつたとは考えにくい。おそらく彼は講書には参加しなかつたのであろう。その代わり、彼には彼なりに力を発揮する場が与えられたのである。詩作の場がその一つであるし、もう一つが久寿二年(一一五五)に上表された辞表の制作である。

この時頼長はすでに氏長者であり、左大臣として執政の座にあつたが、兄忠通は依然閑白の地位にあり、しかも鳥羽院や院近臣との結束を強めて頼長に対抗する構えを崩してはいなかつた。このような緊張した状況下にあつて、頼長はまず、四月二十七日に丞相内覧兵杖辞表の第一表を上表する。表面上の理由は親しい大納言宗輔を大臣に昇進させるためであるが、宗輔が大臣に就任するとなれば、朝廷は頼長にそれに代わる地位を与えなくてはならなくなり、事実

上朝廷に新しくより上位の地位、閑白か摂政の座を求めぬねらいがあつたものと考えられている。⁽¹⁵⁾これは頼長にとつて、現在の地位を失いかねない危険な賭けであつた。茂明はそのような頼長の政治生命のかかった重要な表を制作している。しかし、後日、その表現をめぐつて頼長が茂明を問いただし、それに十分に答えることができなかつた茂明に代わつて第二表は敦光息、長光に表草を制作させることとなる。

後日茂明を召し、帯びる所を皆辞する表に加詣闕両の證有ることを問う。勘申することを得ず。一両勘申すると雖も、猶慥かならず。一昨日難を蒙るの時、作改せず。先例有るの由を申す。今既に其の證無し。甚だ以て奇恠なり。座を敷きて勘発を加え了んぬ。(中略)、此の表既に二失有り、仍つて後の表に至りては長光朝臣に之を作らしむ。

(久寿二年四月二十七日条)

長光の手による第二表が最初に頼長の許に届いたのは、上表の日、五月三日の早朝のことである。しかし、頼長は一読して、数カ所の改正を求め、長光は午後になって再度表の草稿を持参する。頼長はなおも長光の表現に満足せず、度々改めさせていくうちに、「時刻推移」していったという。このような経緯が頼長の氣に入つたとは考えられない。七日後に上表された第三表は再び茂明によつて草されることとなるのである。

重ねて大臣を辞するの表(内覧は辞せず。土御門より之を上ぐ)、午刻許りに茂明朝臣(束帯)表草を持ち來たる

(同年五月十日条)

この度の表についてはこれ以上の記述はなく、大過なかつた模様

であるが、いったんは長光に書かせることにした表を再度茂明に書かせていることは注意されるべきであろう。辞表は形式的なものであつても三度出され、それはすべて同じ作者によるものであることが普通である。茂明を一度辞めさせておきながら、長光の仕事に失望し、再度茂明に第三表を書かせることとなつたのは、異例の処置であり、このような事例から、頼長周辺における茂明の立場がそれほど高いものではなかつたこと、しかし、必要欠くべからざる人材であつたことがうかがえるのではないだろうか。

これまで述べてきた式家儒者たちのなかで特異と言えるのが、茂明の息子達、敦周と敦経である。確かに、仁平三年(一一五三)五月二十一日に頼長が東三条邸で行つた学問寮試の応募者のなかに敦経の名が見られるなど、『台記』に登場しないことはないのだが、その数は従兄弟や父親とは比較にならないほど少なく、講書に参加した形跡も見あたらない。かといつてすでに見たように、忠通の文事に参加したことも確認できず、撰閲家との関わりはよく分からないのである。二人については仁和寺守覚法親王周辺での活動が知られているが、⁽¹⁶⁾そのことも合わせて今後の課題としたい。

おわりに

冒頭で述べた好文の宰相忠通を囲む式家儒者、という印象は式家儒者を偏重する『続文粹』や『無題詩』からもたらされたものであつた以上、当然ある種のゆがみが推測出来るものであつた。これまでそのゆがみについてあまり大きく取り上げられることはなかつたが、史料類から忠通主催作文参加者を整理した結果、忠通の詩筵では式家だけでなく北家日野流出身の儒者たちが活躍したことが明ら

かとなった。そして、『台記』に登場する頼長と式家儒者の関係を考へ合わせるならば、比較的忠通に近い敦光とその息子たち、そして周光、頼長に近い令明とその息子たち、そして茂明という図が現れてくるのである。しかし、あくまでこれは大きな傾向でしかない。家司としての摂関家との関わり、『無題詩』に多く残る茂明と周光の唱和詩などを考えると、問題はこれほど単純ではなく、平安時代後期の式家儒者の動向を語るには、さらにそれぞれの伝記研究が深められる必要があると強く感じる。

最後に、頼長と式家儒者との関係から想起される問題について述べておく。それは、『無題詩』の編纂者についてである。大曾根章介氏は早く『無題詩』入集者に式家儒者が多いなかで、令明の作が一首も見られないのは、令明が頼長の師であったことから、忠通の意向が反映したものとする見解を示された⁽¹⁾。しかし、これまで見てきたように、頼長に親近していた茂明に第五位、五十七首の多くがあることは、それだけでは説明できない。統いて氏は「私は茂明の子の敦周が敦経等を直接の編纂者と推測しているが、遺憾ながら臆断の域を出ることは不可能である。」と論を結ばれるが、その根拠等は示されることがなかった。

塩泰尚氏はこの大曾根氏の論について茂明の入集の問題を指摘し、編纂者を式家以外に求め、周光の弟子である藤原守光、藤原惟方とする説を出されているが、やはり令明が入集していないのは頼長との関係のためとしておられる。しかし、ここでもう一度大曾根氏の結論に目を向けて、茂明の二人の息子たち、敦周と敦経を編纂者と想定するならばどうであろうか。彼らが式家儒者のなかでもやや特異な位置にあることはすでに述べた。彼らならば、父親の作品を多

数入集させることも可能であろう。令明については、やはりうまく説明することは難しいが、ほぼ同じ立場である茂明の作が多数入集していることは、編纂者が令明よりも茂明に近い人物であることを示しているよう。茂明について第六位、五十二首が入集している中原広俊の娘が、彼らの母親であることを考え合わせると、敦周・敦経、あるいは二人のうちのどちらかが『本朝無題詩』の編纂に関わったものと推測され、大曾根氏が「臆断」とされた説を、小稿はわずかながらも補強することができるのではないだろうか。

注

- (1) 大曾根章介「本朝無題詩成立考」、『大曾根章介 日本漢文学論集第二巻』汲古書院・一九九八、初出一九六〇、佐藤道生「藤原式家と二つの集 本朝統文粹と本朝無題詩」、『国文学解釈と鑑賞』第五五巻一〇号、一九九〇—一〇）など
- (2) 本間洋一「本朝無題詩全注釈」(新典社、一九九二—一九九四)に依る。
- (3) 兄公章の妻は藤原敦基女。(『尊卑分脈』)
- (4) 女が茂明に嫁し、敦周、敦経らを産んでいる。(『尊卑分脈』)
- (5) 国史大系本に依る。
- (6) 同様の視点から拙稿「藤原実光考—院政期儒者論(一)」(『詞林』第三号、二〇〇二—二〇〇四)では藤原北家日野流について考察した。
- (7) 以下日野流の家格形成については、細谷勲資「日野流藤原氏の形成過程」(『史聚』二三、一九八八)、杉本理「院政期の文人貴族と「儒者」」(『大谷大学大学院研究紀要』六、一九八九)などを参考とした。
- (8) 実光と忠通の交流については前掲注6拙稿参照。
- (9) 『古今著聞集』巻三「公事」。「保元三年の正月、長元以来中絶の内裏再興の事」によれば、保元三年(一一五八)、周光は八十歳近かったという。
- (10) 実光は延久元年(一一〇六)生まれ、行盛は承保元年(一一〇七)生まれ、承徳元年(一一〇七)生まれの忠通とは約三十歳、親子ほどの差がある。
- (11) 史料大成本により、私に訓読した。
- (12) 和島芳男「中世の儒学」(吉川弘文館・一九六五)、戸川点「院政期の

19	元永二年 (1119) 3/9	18	元永元年 (1118) 3/19	17	元永元年 (1118) 3/15	16	永久五年 (1117) 8/19	15	永久五年 (1117) 7/17	14	永久四年 (1116) 9/29	13	永久三年 (1115) 9/13	12	永久三年 (1115) 6/27	11	天永四年 (1113) 3/	
	佳遊契万年	春裏花尤貴	松竹契遐年										池上鶴 (歌題)	閏三月即事				
	藤原行盛(序者) 藤原合明(講師)	藤原敦光(題者)						藤原実光(序者) 菅原在良(題者) 藤原有業(講師)	上達部・殿上人等集 会				藤原実光 (歌題者)	上達・殿上有其数			菅原在良(読師)	
	殿上人五六人、儒士 十人許、 等、 藤原季通、藤原忠基 源師時、藤原伊通、 藤原宗忠、藤原宗輔、 藤原重基、藤原忠教、 源師時、藤原伊通、																原合明	
	〔中〕 〔法集〕	〔法集〕	〔法記〕	〔法記〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔殿〕	〔無〕 卷四		

29	大治五年 (1130) 9/17	28	大治五年 (1130) 9/	27	大治四年 (1129) 7/	26	大治四年 (1129) 6/17	25	大治元年 (1126) 9/23	24	大治元年 (1126) 9/13	23	天治二年 (1125) 8/15	22	天治元年 (1124) 4/9	21	元永二年 (1119) 10/3	20	元永元年 (1118) 8/19
月明勝地中	聊書中懷	皇	奉哭禪定法	水樹有清風		月明酒域中		明月浮湖上							譬如淨滿月		月前理管絃		
藤原敦光(題者)						藤原永範(序者) 藤原敦光(読師)						藤原宗光(序者) 藤原顯業(講師)	藤原宗光(序者) 藤原行盛(講師) 藤原宗忠(読師)	永縁法印(題者) 藤原敦光(序者) 藤原行盛(講師)	藤原宗光等 殿上人・儒者合十余人	藤原伊通・源雅兼・ 藤原宗光等	藤原資光(序者) 藤原有業(講師)	藤原長光(殿上人五・ 六人、地下君達儒者 合三十人許、	
藤原実光	(源師俊)	源師俊	源師俊	源師時		藤原宗忠		藤原宗忠			殿上人行宗朝臣以下 儒士・成業・非成業 相併二十輩、		源師時、藤原為隆、 殿上人行宗朝臣以下 儒士・成業・非成業 相併二十輩、						
	〔法集〕	〔法集〕	〔法集〕	〔長〕	〔中目〕	〔背〕 卷十	〔中目〕	〔永〕				〔中〕 〔擲〕	〔中〕	〔法集〕					

37 保延五年 (1139) 6/4	36 保延元年 (1135) 3/23	35 長承三年 (1134) 7/29	34 長承三年 (1134) ~ 永治二年 (1142)	33 長承三年 (1134) 2/10	32 天承元年 (1131) 3/23	31 大治五年 (1130) 9/20	30 大治五年 (1130) 9/17
看月自忘晝	養生不若花		病中奉念阿 弥陀仏	松是契長生	宗忠山莊尚 齒会	江湖唯聞鷹	仙家松樹鮮
藤原遠明(講師) 藤原敦光(読師)	藤原実光(題者) 藤原永範(序者) 大江時賢(講師)			菅原時登(序者) 藤原国能(講師)	菅原時登(序者) 中原広俊(講師) 藤原実光(読師)	藤原敦光(序者) 藤原永範(講師)	藤原実光(題者)
藤原頼長、源俊通、 藤原孝能、藤原頼佐、 藤原敦任、藤原成佐	藤原宗忠、藤原実能、 藤原宗成、藤原師頼、 藤原師俊、殿上人兩 三人、儒者七八人(合 十六人)		(藤原実行)	藤原実光	藤原宗忠、三善為康、 藤原敦光、藤原基俊、 藤原頼業、藤原行 盛、藤原篤昌、博士・ 文章生当時好文士十 五人	藤原伊通、藤原頼頼、 藤原宗成、藤原実 光、以下十人許、	藤原敦光
『台』 『法集』	『中』 『法集』	『長』	『法集』		『中』 『長』	『中』	

50	49	48	47	46	
春	微月浮江上	功德不可数	其花開敷	衆罪如霜露	題
藤原周光	藤原実光	藤原守光	藤原雅頼	藤原永範	主 席 者
『無』卷四	『擲』『法集』	『擲』	『擲』	『擲』『法集』	出 典

○年次不明

43 久安六年 (1150)	42 久安六 (1150) 2/3	41 天養元 (1144)	40 康治元 (1142) 10/3	39 康治元 (1142) 9/13	38 保延五 (1139) 6/4
夏二首		閑李部大卿 依病出家、 悲嘆之余、 粗呈所懷	願成仏道		花木逢恩賞
藤原周光	藤原有光(講師)				藤原有光(講師) 藤原敦光(読師)
	藤原頼長	藤原敦光	源明賢、(藤原頼輔)		菅原清忠、 藤原宗兼、藤原成佐、
卷四『無』	『台』	『法集』	『法集』	『台』	『法集』

※出典に使用した史料は以下のテキストによる。『殿暦』(殿)…
大日本古記録、『中右記』(中)、『中右記目録』(中目)、『長秋記』

(長)、『台記』(台)：『増補史料大成』、『法性寺殿御記』(法記)：『函書寮叢刊』、『九条家歴世記録一』、『永昌記』(永)：『天永二年十一月二十八日の記事については大日本史料第三編之十二』、それ以外の記事は『増補史料大成』、『法性寺殿御集』(法集)：『尊経閣文庫本』、『中右記部類紙背漢詩集』(背)：『函書寮叢刊』、『平安鎌倉未刊詩集』、『本朝無題詩』(無)：『本間洋一』、『本朝無題詩全注釈』(新典社、一九九四)、『擲金抄』(擲)：『真福寺善本叢刊第十一卷』(臨川書店、一九九八)、『左京大夫顯輔集』(顯)：『新編国歌大観』

—— 本学大学院院博士後期課程 ——